

なら学談話会講演録

## 奈良甲冑師を知っていますか？

### —中近世奈良の甲冑生産—

宮崎 隆 旨 (元・奈良県立美術館館長)

ご紹介にあずかりました宮崎です。もう退職していますが、すぐ近くの県立美術館に開館時から30年ほど勤めておりました。今日は奈良の甲冑師の話をさせていただきますが、甲冑については全く知らないという方もおられると思いますので、まず甲冑とはどんなものなのかを簡単に説明し、一旦スライドを見ていただいて、その後に奈良の甲冑師について話したいと思います。

それから、今後中世・近世という用語を多く使います。歴史用語としての中世は鎌倉時代から室町時代、近世は安土桃山時代から江戸時代をさすのが普通ですが、今日の話では和風の甲冑が形成される平安時代後期を含めて鎌倉・室町時代を仮に中世と呼んでいます。安土桃山時代から江戸時代の近世は変わりません。

#### I 甲冑とは

まず甲冑の名前ですが、本来「甲」は主に胴を指す「よろい」、「冑」は「かぶと」、「甲冑」と言う場合は全体を指します。しかし「甲」と「冑」は早くから混同して使用されています。レジュメに『源平盛衰記』の一例を取り上げていますが、ここでは「黒糸威ノ冑二、白星ノ甲」と、逆に用いていますので、軍記物を読む場合は注意する必要があります。また「かぶと」は近世には「兜」の文字を使うことが多いのですが、ややこしいので冑に統一します。

**中世の甲冑** 次に甲冑の種類です。これは口で言っても分かりにくいと思いますので、後に写真で説明しますが、中世にはよろい 鎧 (大鎧)、おおよろい 胴丸、どうまる 胴丸鎧、どうまるよろい 腹巻、はらあて 腹当が使用されました。鎧は馬に乗っての弓矢の戦いに適した上層武将用の重厚な甲冑で、右脇にわいだて 脇盾を別に付け、胴の下端から垂らすくさずり 草摺は四枚とし、原則として冑と、おおそで 大袖 (大きな袖) が付きます。これに対して胴丸は歩兵用の簡便な甲です。脇盾は用いずに胴を巡らせた両端を右脇で引き合わせ、草摺は歩きやすいように8枚に分割しています。当初は冑や大袖は付けてい

ません。胴丸鎧は鎧と胴丸の折衷様式で、あまり普及しませんでした。愛媛県おおよまづみじんじやの大山祇神社に中世唯一の遺品が伝わっています。腹巻は背中に隙間を開けて引き合わせる胴丸以上に軽快な甲です。腹当は最も簡便な甲です。ちょうど剣道の胴のように胴の前面だけを覆うもので、衣服の下に着用することもありました。

南北朝時代頃から重厚過ぎる鎧はあまり実用されなくなり、騎馬の武将の間でも胴丸に冑と大袖を付けて使用するようになり、歩兵用の甲として腹巻が現れます。そしてやがて腹巻にも冑や大袖を付けるものがみられるようになります。

なお、中世には胴丸と腹巻は逆に呼ばれています。つまり、今日言う胴丸は当時は腹巻、腹巻は胴丸なのです。ところが近世にはこれが逆に呼ばれるようになり、今日に受け継がれています。その根拠や理由は長くなるので省略しますが、中世の文献を読む場合は、結論としてこのことを知っておく必要があります。

次に冑ですが、中世にはほしかぶと 星冑とすじかぶと 筋冑が使用されました。ともに細長い台形の鉄板を半球状に並べて鋳で留めますが、星兜は鋳の頭を装飾的に大きく作り、これを星に見立てて星兜と呼んでいます。これに対して筋冑は鋳の頭を潰して平坦にし、各板の片側を小さく直角に折返した筋だけが目に付くので、筋冑と言われています。この折返しは初期のものを除く星冑にもありますが、大きな鋳がより目立つので星冑と称したわけです。平安時代後期にまず星兜が用いられ、筋冑は南北朝時代頃から現れて室町時代には星兜を凌いで主流になります。

次に甲の素材について触れておきます。中世の甲の素材は鎧や胴丸といった種類に関係なく、全て「さね 札 (小札)」と「おどしげ 威毛」です。札とは小指から親指大程度の小片で、鍛えた牛革いためがわ (撓革) と鉄があり、普通は革の札を主体に、防御上重要な所には鉄札を交えます。札の数は、例えば桜井市の長谷寺の紅糸威鎧の場合、これは室町時代前期のものですが、胴だけで1793枚の札を

使っています。これに大袖672枚を加えると2467枚になります。数は勿論自分で数えました。鉄札と革札の見分けは小さな磁石を使っています。これは結構時間と根気がいることで、時々間違っただけで数え直しながらひたすら札数を数える姿は、他人が見たら随分滑稽に映ったことでしょう。

この札を半分ほどづつ重ねて横に並べ、細い革で綴じて横長の板状にし、その札板を胴は6から7段、段数は甲冑の種類や時代によって違います、草摺は原則として5段を、様々な色の紐で上下に連結します。これが威毛です。威しは「緒通し」の転訛と言われています。材質は稀に布帛もありますが、組糸か鹿の鞣し革がほとんどです。カワの漢字には革・韋・皮があり、甲冑では主に「革」は牛の撓革、「韋」は鹿の鞣し革、「皮」は毛の付いた状態のもので熊皮などが使われています。

**近世の甲冑** 大規模な戦乱が相次ぎ、甲冑の需要が飛躍的に増えた安土桃山時代から江戸時代前期になると、新たに登場した強力な破壊力を持つ鉄砲への対応も加わって、札に替えて大型の鉄板を多用する当世具足が現れます。長谷寺の鎧の例を思い出して下さい。約2500枚の札を作り、それを横に綴じ合わせて弾力性のある板状にし、一枚毎に威毛で上下に繋ぐ作業では、需要に追いつかなかったのです。威毛は草摺などの必要な部分には残りますが、『武田家武具条目』に「糸毛之具足無用二候」とみえるように、全体としては大幅に後退します。これらには鉄板を多用した多種多様な形態があり、当世具足はその総称ですが、基本的には右脇で引き合わせる胴丸の系統をひいています。

また冑は、中世の筋冑と星冑も引き続いてみられますが、様々な形態の当世冑が主流になります。ことに簡易な鉄板の内鉢の上に、和紙を重ねて種々の事物を形象した外鉢を被せた張懸の冑が現れ、簡単に思いのままの造形ができることから、自己を主張する恰好の具として武将たちの間に流行します。これらは後に写真を見ていただくと分かりやすいと思います。また小具足とよばれる頬当、籠手、袖、大腿部を覆う佩盾・臍当などを備えるのも当世具足の特徴です。

甲冑の名称も中世と近世では変化します。中世では胴の表面をほとんど覆い尽くす威毛の色と、種類（形式）によっています。レジュメに『平家物語』の

九郎義経其の日の装束には、赤地の錦の直垂に、紫すそごの鎧きて、くわがたう（っ）たる甲の緒しめ

の例をあげています。紫すそごは紫裾濃、つまり下になるほど紫色が濃くなる威毛です。「くわがた」は冑の立物、ここでも「かぶと」に甲の字を宛てています。これが近世の当世具足になると、威毛の色を記す場合もありますが、例えば

赤糸威ノ具足ニ唐冠ノ甲ヲ着シ（『慶元闘戦記』）  
朱具足を着し、頭形ノ冑ヲ被り（『尾州長久手戦記』）

などと胴の構造、漆の色など様々で、兜の形を添えることも少なくありません。

ここで、一旦これまでの甲冑についての写真を見てもらいます（写真説明省略）



張懸銀白檀塗燕尾形兜。宝仙寺蔵（拙著『戦国変わり兜』角川書店より転載）。

## Ⅱ 奈良甲冑師

これからは本題の奈良の甲冑生産と甲冑師に移ります。レジュメの2ページを見て下さい。最初に「中世から近世半ばごろまでは、奈良はわが国最大の甲冑生

産地」と書いていますが、その根拠を中世と近世に分けて述べたいと思います。

### 中世の奈良甲冑師

**春日大社の鎧と胴丸** 貞治6（1367）年7月に京都の僧素眼そがんが書いた『新札往来』しんさつおうらいは、成立の年が確かで、甲冑師の住所と個人名を記した最も早い史料ですが、そこに

鎧・腹局者。自<sub>二</sub>南都<sub>一</sub>、召<sub>二</sub>左近士・源内等ノ細工ヲ<sub>一</sub>威シレ之候。甲鉢・髓當等、脇戸之作。籠手者。大鳥。當世賞翫ニ候。

とあります。「腹局」は「腹巻」の誤記、「南都」は奈良の雅称です。つまり奈良から左近士さこんじ、源内げんないなどの甲冑細工を呼び寄せて威させ、冑の鉢や臑当・籠手などの鉄で作る部分も奈良の脇戸わきどと大鳥おおとりが鍛えたとするものです。このうち左近士家と脇戸家は室町時代後期まで続いています。甲冑師の職掌は基本的に仕立したて（威）と鍛冶に大別されます。後で言うように近世の奈良ではさらに職掌が細分されて大量生産を行っていましたが、ともかく南北朝時代には奈良の甲冑師の名声が京都にも聞こえていたことが知られます。

春日大社に伝来するいずれも豪華な飾金物で覆われた6領の鎧と、格調高い3領の胴丸も、中世の奈良甲冑師の高度の技術を示すものと思われます。個々の見事な金物については後でじっくりスライドを見ていただきますが、このうち2領の鎧と2領の胴丸は春日社の宝倉に伝来し、4領の鎧と1領の胴丸は本談義屋ほんだんぎやに伝来していました。本談義屋は春日社と興福寺が一体化していた当時、春日社境内にあって興福寺の僧が経読談義する屋舎です。本談義屋は不幸にも寛政3（1792）年に火災があり、甲冑は金属部分だけが残っていますが、被災前の記録や絵図が伝わり、宝倉の鎧と遜色のない豪華な金物で飾られていたことが知られます。特に隙間がないほどに飾り金物で覆われた一群の鎧は、青森県の櫛引八幡宮くしびきに同様の1領伝わりますが、6領も纏まって伝わるのは他になく、それも大金物で動きが制約されるものもあるので、奉納を目的とした格別な性格をもつ存在であったことがうかがわれます。

これらの鎧と胴丸9領のうち、注目されるのは鎌倉時代と南北朝時代の2領の鎧の冑に「一」と「丁」、南

北朝時代の胴丸1領の冑に「大」の符号が刻まれていることです。二番目はチョウと言いましたが、文字ではなく単に横棒と縦棒の組み合わせです。他に「上」などを含めて、こうした符号を刻む冑は、国内外を合わせて他に10数頭知られます。それらには春日大社のような豪華な飾金物はありませんが、いずれも精巧な作りの上製品です。そして、それらのうちの3頭が春日大社伝来品にみられ、春日大社伝来品のうちで、冑に鍛冶の名前を刻むことが広まる室町時代後期の胴丸の冑には、これは本談義屋で罹災したのですが、奈良の甲冑鍛冶「春田宗次」の銘が鐫られています。この他にも理由はあるのですが、ともかくこれらの符号は、冑に作者銘を鐫るようになる前の奈良の甲冑鍛冶の符号と私はみています。

また、こうした符号が刻まれていない春日大社伝来品も、特に鎧は6領全てが同様に豪華な金物で飾られていること、また鎌倉時代の鎧の1領には、雌雄の鹿や春日野周辺の景観を表現して、地元の者でなければ作られない意匠の金物で飾られていることなどから、製作自体は奈良甲冑師が行ったものと考えられます。春日大社伝来甲冑の奉納者については色々な伝承がありますが、確かな裏付けを伴うものはほとんどありま



国宝・紅糸威鎧（梅に蝶金物）と冑の「一」の符号。鎌倉時代、春日大社蔵（拙著『奈良甲冑師の研究』より転写）。



せん。ただ、本談義屋で罹災した1領の鎧の金物には、笹竜胆と二羽の雁という特殊な文様が表されていて、これは室町時代の諸家の家紋を集めた『見聞諸家紋』に、「和州之越智」と記した紋と同一なので、室町時代初期にはほぼ大和の国を統一した南大和の越智氏が奉納したものともて間違いのないと思います。越智氏は奈良の手掻包永が鍛えた打刀も本談義屋に奉納しています。前に触れましたように、南北朝時代には奈良甲冑師の盛名は京都まで知られていて、この鎧も越智氏がわざわざ他国の甲冑師に製作させて奉納したとは考えにくいので、打刀と同様に地元奈良の甲冑師に作らせたものとみられます。

つまり、今日まで春日大社に伝来する中世の6領の鎧と3領の胴丸は、奉納者は誰にせよ、春日明神に奉納するために注文を受けた地元の奈良甲冑師たちが、精魂を込めて作り上げたものと考えられるのです。

**戦国時代の奈良甲冑師** 前に言いましたように、室町時代後期、いわゆる戦国時代になると、作品に甲冑師の名前を镌で刻むようになります。これはほとんどが冑に限られていて、甲冑鍛冶の名前です。これも先に言いましたように、甲冑師の職掌は仕立と鍛冶に大別されます。つまり原則として仕立を行った甲冑師の名前は記されません。稀に表すことがありますが、後にみる岩井与左衛門のように、その場合は镌で彫るのではなく、朱漆や黒漆で書きます。このことを誤解して、冑の銘からその人が甲冑全体を作ったとみられがちですが、それとは別に仕立を行った甲冑師もいたことを知っておいて下さい。もっとも、全ての冑に銘があるわけではなく、数の上では無銘の方がはるかに多くを占めています。

戦国時代にはおびただしいの奈良甲冑師の在銘の冑が現れます。東日本でも銘を鐫った冑が現れますが、広い地域に分散して数もそれほど多くはなく、一都市としての絶対数は奈良が傑出しています。具体的に奈良の甲冑師の在銘品は、春田通親、春田宗次、春田宗定、春田吉定、春田光信、春太光信、春田光定、春田時貞、春田直定などで、中には同名を襲名している家もあり、例えば春田光定は三代続いたという系図も残っています。また光信は「春田」と記すものと「春太」と記すものがあり、両者は別人のようです。これらのほとんどが「春田」を名乗っていますが、全て一族・一門というわけではなく、甲冑鍛冶の職掌を表してい

ると理解しておいて下さい。後に言いますように、このことは近世の具足屋の多くが「岩井」を名乗ったのと同様です。当時は京都も奈良に次いで甲冑の生産が盛んであったと考えられますが、京都の甲冑師の在銘品が全くと言っていいほど見当たらないのは不思議です。これは銘を鐫る風習の地域の違いかも知れません。

戦国時代の奈良の甲冑は、西日本を中心に広く全国に供給されていたようです。今日はその代表的な遺品を2例紹介しておきます。一つは広島県の厳島神社の鎧です。冑と大袖が付き、冑の鉢裏に「和州南都住春太光信作」の銘があります。そして天文11（1542）年5月20日付けの大内義隆の寄進状が添っています。大内義隆は一時は周防・長門など6カ国の守護を務めた有力な戦国大名です。当時になると鎧は実用されなくなりますが、厳島の神への奉納の為に、伝統を誇る奈良の甲冑師に注文した鎧です。唐草に輪宝を配した金物や、波に龍と梵字の染草を駆使した入念な作りで、中世の鎧の掉尾を飾る名品として知られています。

いま一つは甲斐の名門武田氏最後の当主武田勝頼奉



重文・黒韋肩紅糸威鎧。冑銘「和州南都住春太光信作」、天文11年大内義隆奉納、厳島神社蔵（拙著『奈良甲冑師の研究』より転写）。

納と伝えて、静岡県の富士山本宮浅間大社に伝わる胴丸です。この胴丸には胄と大袖が付き、大袖の化粧の板の裏に「天正三年春太光信父子」の作銘が記されていると言われています。化粧の板とは、袖の上端部の鉄板と小札の頭の間に配した木板で、多くが菖蒲模様の韋で包んでいます。そして「言われています」と言ったのは、幾人かの先輩の甲冑研究者が記されていますが、私自身は実際にその銘を確認していない、正しくは確認できないからです。勿論、大袖を含めた胴丸は30年ほど前に寄託先の東京国立博物館で調査しました。しかし、その当時から左袖の化粧の板は失われ、右袖の化粧の板だけが残っていますが、その裏を見るためには、化粧の板の上から打った金物を一旦取り外さなければならず、とてもそんな破壊行為はできません。しかし以前に何人かの研究者は見られたのでしょうか。この胴丸は、胴・胄・大袖の作りがそれぞれ異なり、武田勝頼奉納の社伝が裏付けられるのは、金物の鉾頭に花菱紋が彫られた大袖だけです。しかし大袖だけを奈良に注文したとは考えにくいので、恐らくこの大袖と胄を伴った胴丸が発注され、後に胴と胄は現在のもので入れ替わったのではないかと思います。

以上、代表例として西の大内義隆と東の武田勝頼が奈良に注文した甲冑を取り上げましたが、奈良で作られた戦国時代の甲冑は広範囲な地方に供給されていたようです。比較的移動の少ない古社寺の伝来品をみると、当然多い畿内と前の二例を除いても、高知県の高岡神社、愛媛県の大山祇神社、山口県の源久寺、岐阜県の清水神社、神奈川県の高岡八幡宮、長野県の正行寺などに及んでいます。

**腹巻屋の活動** 前にも言いましたように、室町時代になると重厚すぎる鎧は次第に戦場から姿を消し、胴丸が主流になりました。この胴丸は中世には腹巻と呼ばれていたことも、前に述べた通りです。室町時代後期になると、奈良の史料に「腹巻屋」の名が見られるようになります。腹巻屋は甲冑屋、つまり甲冑商人です。近世には具足屋と呼ばれます。腹巻屋の実態は必ずしも明らかではありませんが、当時は商・工が未分化で、完全な商人ではなく、ある程度製作も行っていたのではないかと思います。これは近世の具足屋からの推測です。

長享元（1487）年、東大寺鎮守八幡宮、これは現在の手向山八幡宮ですが、その祭礼である転害会てがいえの費用

を郷民に課した記録の『東大寺八幡宮祭礼棟別人別銭帳ちやう』には、中御門と押上に腹巻屋が各一軒、また押上には「兜屋」も一軒みえます。兜屋は胄を販売していた商人の家か、胄を造っていた工人の家かよく分かりません。このあたりは京街道、現在の国道169号線添いの比較的狭い地域です。また元亀3年（1572）の『小五月郷間別改打帳こきつきごう まべつあらためうちやう』、これは大乘院門跡が移り住んだ元興寺禅定院の鎮守社である天満社の祭礼に参加する郷民に負担させた費用の記録で、興福寺南部の地域が対象です。祭礼はこきつきえと呼ばれていました。これには

南鶴郷・薬師堂郷に腹巻屋が各2軒

西城戸郷・餅飯殿郷・北鶴郷・内院郷に腹巻屋が各1軒

無縁堂郷にハリタが1軒

の8軒の腹巻屋と1軒のハリタが記されています。ハリタは甲冑鍛冶ではないかと思います。実際には「ハラマキヤ又七」のように全て名前が書かれていますが、ここでは軒数だけをあげました。

腹巻屋にはこうした店舗を構える家の他に、諸国を巡って行商する者もありました。興福寺の僧の多門院英俊たもんいんえいなどが記した『多門院日記』には、そうした腹巻屋の一人で、英俊の許に出入りしていた腹巻屋藤二郎と、その子の政丸（のちに甚三郎）のことが記されています。ここでは詳細は省略しますが、藤二郎の場合は主に西国に行商に出かけ、数年間帰らないこともあったようです。最後は隠岐おきの国にいたようですが、その後消息不明になっています。

## 近世の奈良甲冑師

**奈良甲冑師の人数** 近世になると、奈良の甲冑師に関する個人の活動や具体的な数値がある程度明らかになります。まずその人数についての史料としては、寛文10（1670）年の『奈良町北方式拾五町家職御改帳』があり、甲冑関係者は具足屋と具足細工に大別して23軒が記されています。ただし、これは町代支配135町中の北方25町を対象にしたものなので、単純計算では奈良町全体の約19%に限られた地域です。次に貞享4年（1687）の『奈良曝』には59人があげられています。ここでは具足屋・胴鍛冶・胄鍛冶などに細分化され、奈良町全体が対象です。またこれも奈良町全体を対象にした享保4年（1719）の『奈良町中甲冑刀鍛冶師書上

史料	成立	都市	数	内訳	住所	氏名
『奈良曝』	1687年	奈良	14	具足屋 14	※江戸住 (高天町 岩井与左衛門)	高天市町 岩井孫四郎 今辻子町 岩井清兵衛 勝南院町 岩井善兵衛 西寺林町 岩井三郎左衛門 中院町 岩井彦四郎 福智院町 岩井与介 福智院町 岩井茂作 薬師堂町 春田又左衛門 薬師堂町 岩井重兵衛 西新屋町 岩井久左衛門 西新屋町 林 嘉兵衛 花園町 岩井吉右衛門 毘沙門町 岩井吉兵衛 上三条町 半田喜兵衛
『諸国萬買物調方記』	1692年	京都	11	具足屋 10	岩井姓10	
				具足鍛冶 1	小嶋姓 1	
		大坂	7	具足屋 7	岩井姓 7	
		江戸	6	具足屋 4	岩井姓 3、藤原姓 1	
				具足鍛冶 1	明珍姓 1	
				着込 1	種村姓 1	

帳』には39人があげられています。

この3史料に、対象地域の偏在、脱漏分、成立時は当人は不在などの補正を加えると、奈良町全体では

寛文10（1670）年頃、158人

貞享4（1687）年頃、72人

享保4（1719）年頃、46人

前後と推計されます。そして試みに寛文10年から貞享4年までの減少率を、大坂夏の陣が起こって甲冑の需要がピークに達した元和元（1615）年まで溯らせると、勿論、机上の計算にすぎませんが、369人になります。ともあれ、泰平の世になっても、ほぼ確実視される貞享年間（1684～88）に70人前後、享保年間（1716～36）にも40人前後の甲冑師がいた都市は他にはなく、当時も奈良がわが国最大の甲冑生産地であったと言えます。

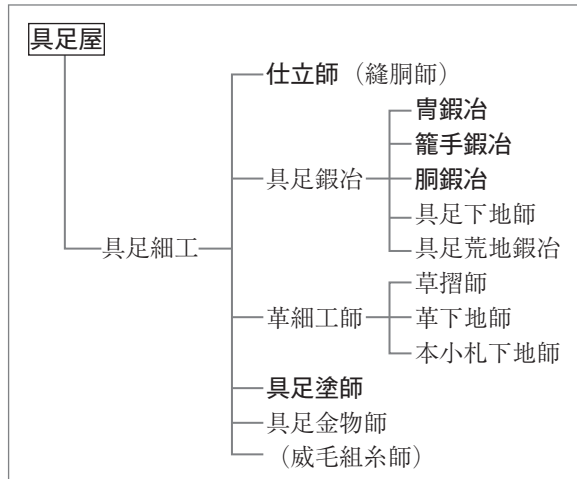
これを他の都市と比較してみましょう。表は貞享4（1687）年に刊行された『奈良曝』に記す奈良の具足屋と、ほぼ同時期の元禄5（1692）年刊行の『諸国萬買物調方記』に記す三都（京都・江戸・大坂）の主要な具足屋の数です。三都の具足屋についても住所と名前が記されていますが、職種と姓に省略しました。後にも触れますように、具足屋は下請けの具足細工が造った各部品を集め、製造の最終工程である威・仕立を自家で行って完成させる甲冑師を兼ねた甲冑商です。両書の間には、5年の刊行年の違いの他に、具足屋以外に鍛冶や着込師を加えるか、加えないか、また甲冑商と

しての規模など不明の点もあります。しかし散在する他の部分的な史料なども押しなべてみても、奈良14、京都11、大坂7、江戸6という数値は、凡そ17世紀後期の甲冑市場としての生産量の相対比を表しているとみられます。この他、甲冑は諸藩でもお抱えの甲冑師によって作られていましたが、その量は自藩内の需要に限られ、市場と言えるほどではありません。

しかし泰平の世が続いた江戸時代後期になると、一定した需要先を持たない奈良・京都の甲冑生産はさらに減少していくのに対して、江戸屋敷が置かれて諸国の武士が集住した江戸は次第に活況を呈し、ことに国内外の政治的緊張が加わった幕末には数多くの甲冑師が集まるようになります。正確な数は分かりませんが、少なくとも130人前後が知られ、奈良に代わって最大の中央市場になります。

**量産体制** 前にも言いましたように、甲冑師の職能は仕立と鍛冶に大別されますが、近世の奈良では量産に対応した職種の細分化がありました。レジュメの3ページ左下の表は『奈良町中甲冑刀鍛冶師書上帳』に記す最も細分化したものです。これは近世の体制ですが、おそらく需要が多かった中世末に整ったものと思われます。元和年中（1615～24）に火災で武具が消失した加賀藩が、急遽足軽具足2800領を奈良で調達していますが、こうした職種を細分化した量産体制によって可能になったのでしょうか。一番下の括弧で括った威毛組





糸師は、その存在を記す『奈良坊目拙解』によってい  
ます。

また太字は『奈良曝』に記す職種で、具足屋、具足  
胴鍛冶、胄鍛冶、具足籠手鍛冶、具足塗師、具足仕立  
師の6種に分けています。その人数比は、具足胴鍛冶・  
胄鍛冶・具足籠手鍛冶を具足鍛冶として一つに纏め  
ると、4種は大体四分の一づつになります。大量の注文  
などの場合を除くと、近世中期以後はこの程度の職種  
に分かれていたのではないかと思います。ここで注  
目されるのは具足屋の存在です。前にも言いましたよ  
うに、具足屋は下請けの形で結ばれた具足細工が造っ  
た各部品を集め、製造の最終工程である威・仕立を自  
家で行って完成させて販売するという、元締め的な立  
場の甲冑師であり、甲冑商でもありました。

### 近世奈良甲冑師の特質

近世の奈良甲冑師には、他国には見られない格別な  
ものがありました。今日はそのうち、江戸幕府の御用  
具足師に奈良の岩井与左衛門家が登用されて幕末まで  
続いたことと、奈良の具足屋のなかには、奈良に居な  
がら大名家の扶持人になるという特殊な形態があった  
ことの二つを紹介します。

**岩井与左衛門家** 岩井与左衛門は徳川氏の御用具足  
師・具足屋で、江戸幕府開設後は幕府の御用具足師に  
なった家です。そのために、先にも触れましたように、  
与左衛門家と技術的にも血縁的にも関わりのない具足  
屋も岩井を名乗るようになります。『奈良曝』は

具足屋の家二三家あり。(略) 二男家は岩井名字、  
松平加賀守殿具足屋城戸町中屋岩井八郎左衛門  
(略)。親ハ岩井与左衛門師匠なり。しかるに中屋

八郎左衛門死て、其子新吉ハ百姓となり此家たへ、  
弟子の江戸屋与左衛門家さかゆるゆへに惣領筋と  
もいひなし、具足屋の分何れも岩井を名字とす。  
此岩井与左衛門家は公方様御具足屋也。(略) 当代  
岩井与左衛門家はんじやうなるにつき、具足不残  
岩井を名字とする。

と記しています。与左衛門がどのような事情で徳川氏  
に登用されたのか詳らかではありませんが、おそらくそ  
の背景には、長い伝統をもち、且つ最大の甲冑生産地  
としての奈良があったものと思われます。遅くとも慶  
長年間(1596～1615)の初めには徳川氏の用を勤めて  
いて、徳川家康が関ヶ原の戦と大坂の陣に着用(携行)  
したという歯染具足しだくそくを作っています。その名はこの具  
足に歯染の前立が添うことから名付けられたもので、  
徳川家に勝利をもたらした吉祥の重器として格別視さ  
れてきました。家康の薨去後に久能山東照宮に納めら  
れますが、3代將軍家光の命によって、後に4代將軍  
になる家綱の具足着初きぞめのために江戸城に移されます。  
そして家綱が將軍になるとその写し(模造品)が作ら  
れ、以後の歴代將軍はこれに倣って歯染具足の写しを  
作り、毎年正月11日の具足始に飾られました。本当の



縹糸地四石畳紋威胴丸具足。朱漆銘「南都岩井与左衛門作」、  
徳川家康より英国王に贈呈、英王室蔵、ロンドン塔展示 (拙  
著『奈良甲冑師の研究』吉川弘文館より転写)。

齒染具足と歴代将軍の写しは、明治維新後に他の諸道具とともに徳川家から久能山東照宮に奉納されています。

岩井与左衛門が作り、今も奈良に保存されているものに、漢国町の漢国神社の具足があります。これも徳川家康が奉納したものです。慶長19（1614）年に大坂冬の陣が起こり、11月15日に家康は大坂に向かう途中に奈良に止宿し、翌日与左衛門の家を休息所として、隣接する漢国神社にこの具足を奉納しました。このことは漢国神社の宮司の日記に書かれています。日記によると、具足を飾って礼拝している時に冑が落ちたとみえます。そのためでしょう、具足に冑は付いていません。ただし前立は伝わり、これも齒染なので、齒染具足とも呼ばれ、奈良国立博物館に寄託されています。

与左衛門が作った具足は国内だけではありません。家康が慶長19（1613）年にイギリスの国王ジェームズ1世に贈った2領の具足には、ともに「南都岩井与左衛門尉作」の銘が記されています。与左衛門は鍛冶は行わないので、冑の後ろに垂らす鞆しころの裏に朱漆で書いています。かつては2領がロンドン塔の英王立武器博物館に展示されていましたが、現在は1領がロンドン塔に、1領はリーズに新設された王立武器博物館に展示されています。またパリのオテル・デ・アンヴァリッドの軍事博物館には、慶長期の同類の具足が4領展示されていて、そのうちの1領に「南都岩井与左衛門尉作」、1領に「岩井与左衛門尉作」の朱漆銘が確認できます。これも黒漆塗の鞆の裏に朱漆で書いています。パリの2領の伝来事情は現在のところはっきりせず、直接フランスの元首に贈られたのか、もしくは他国を経由してパリに収まっているのかよくわかりませんが、いずれにしても、家康が2代将軍秀忠から外国の元首への贈品とみてよかろうと思われます。

岩井与左衛門は当初は奈良の高天町と江戸に家屋をもち、両地を行き来していましたが、2代目の与左衛門の時の明暦3（1657）年に一家をあげて江戸に移っています。ちにみに江戸幕府お抱えの具足師は長年にわたって与左衛門の名前を世襲した岩井家だけでしたが、享保年間（1716～36）の初めに薬師堂町の岩井源兵衛と、池之町の春田播磨家も召し出され、「御具足師」は奈良出身の3家が独占します。その後、破損が進む膨大な幕府の御貸具足、いわゆる足輕具足の修理のために、寛政3（1791）年に地元江戸みょうちんの明珍家が登

用されますが、格付けは「御具足師」ではなく「御具足師並」でした。

**大名家扶持人の具足屋** レジュメの4ページ下段の右を見て下さい。奈良県立図書情報館の藤田文庫に収められている「正徳三年町代高木又兵衛諸事控」という写本には、当時の奈良の具足屋として12家をあげていますが、そのうちの5家について、

薬師堂町	春田又左衛門	細川越中守様御扶持人
高天市町	岩井三郎左衛門	松平讃岐守様御扶持人
今辻子町	岩井与七郎	松平越中守様御扶持人
三条町	岩井半兵衛	岡部美濃守様御扶持人
三条町	半田喜兵衛	紀州様御具足師

と記しています。正徳3年は西暦で1713年になります。細川越中守は当時の熊本藩主、松平讃岐守は高松藩主、松平越中守は宝永元（1710）年伊勢桑名から越後高田に転封した定綱系久松松平氏、岡部美濃守は岸和田藩主、紀州様は和歌山藩主です。半田喜兵衛を扶持人ではなく御具足師とするのは、御三家に対する配慮で、扶持人と違いはありません。

では、これらの大名家と扶持人の奈良の具足屋とは、具体的にどのような関係で結ばれていたのでしょうか。5家のうち、永青文庫にまとまった史料が残る細川越中守扶持人の春田又左衛門家について取り上げてみます。初代の春田又左衛門宗栄は本名を木村新助といい、郡山城主豊臣秀長の家臣であったが、秀長の没後浪人して奈良で甲冑師になったといえます。『奈良曝』には又左衛門家を胴鍛冶としていて、在銘の遺品からみても甲冑鍛冶を主職としたようです。人を介して細川忠興（三斎）に召し出され、慶長8（1603）年に奈良の薬師堂町に住みながら、豊前国の雨窪村に100石の知行地を得ています。甲冑師が知行地を支給されることはほとんどなく、破格の厚遇と言えます。そして細川氏が小倉から熊本に移封されると、そのまま肥後で知行地100石を下されています。つまり扶持人の関係はあくまで大名と具足屋間の結び付きであって、大名が他国へ移封してもそのまま継続したことが知られます。又左衛門家は初代の宗栄以来、又左衛門の名を世襲し、安政7（1860）年に家督を継いだ13代の安太郎まで存続しますが、常に奈良在住のまま100石の知行を得ています。又左衛門が藩主の国元に赴くのは、自家



と細川氏のそれぞれ代替わりの時に、知行の安堵を受けることや、正月の年始の礼式に列席することなどで、藩に関わる甲冑の仕事は環境の整った奈良で行っていたようです。

何度も言いますように、幕末まで100石の知行を得た春田又左衛門家の場合は、扶持人としてはむしろ例外でしょう。元和5（1619）年から元禄11（1689）年まで、水野氏が藩主時代の福山藩では、奈良の具足屋市兵衛が20石5人扶持を支給されて毎年一定期間福山に赴き、藩主や家中の具足を作っています。時期的に「正徳三年町代高木又兵衛諸事控」には取り上げられず、また福山藩の史料なので扶持人とは呼んでいませんが、奈良側で言えば扶持人の一人でしょう。水野氏が奈良の具足屋を起用したのは、水野勝成が福山の前に大和郡山の藩主だった縁かと思われます。前にあげた5家の扶持人のうち、春田又左衛門以外の正確な俸禄は分かりませんが、市兵衛の20石5人扶持あたりが目安になりそうです。いずれにしても、こうした大名家の扶持人の存在も、奈良で作り出す甲冑の安定的な確保にあったものと思われます。

時間のこともありますので、奈良甲冑師の活動はこのぐらいにしておいて、あとは奈良の甲冑師が作った甲冑の例をスライドで見させていただいて終わりたいと思います（写真と説明省略）。

**司会：** 先生、どうもありがとうございました。16時ぐらいまでと考えておりますので、お一人ぐらい質問お受けしましょうか。いかがでございましょうか。

**女性：** すごく初歩的な質問で申し訳ないんですが、さっきの大内義隆の寄進状、兜と胴の部分の甲があって1領っていうふうに数えてたようなんですが、例えば時代小説とかを見ると甲1領ってというような表記があるんですけども、兜も含んでも1領と言うんでしょうか。

**宮崎：** 甲冑と言う場合は、文字は「よろい」「かぶと」ですが、その他の部分品が付けば、それらも含めます。数え方は、甲冑全体でも1領、胴だけでも1領です。冑だけの場合は、1刎（はね）と数える場合もありますが、普通は1頭（いっとう）と数えます。大内義隆の寄進状ですが、まず全体を示して「鎧一領」と書き、それを具

体的に説明して「毛黒革肩赤 金物輪宝 甲同毛」と小さい文字で二行に書いています。「毛」は胴の威毛です。上部が赤糸でそれ以外は黒韋の意味です。「甲」はここでは「かぶと」を指しています。「同毛」は冑も胴の黒革肩赤威と同じ威毛である、という意味です。

**司会：** 一般にはあまり知られていないが、奈良は中世、近世の最大の甲冑生産地だったということで、今日改めて伺いますと本当に奈良が誇るすばらしい文化であるということを再認識させていただきました。宮崎先生、ありがとうございました。

（平成27年12月5日 なら学談話会 於奈良女子大学）